



岩手食文化研究会便り

発行日 二〇一一年十二月七日

編集者 宮本 義孝 第十八号

「かわいキャン」に被災地支援活動の皆さんを訪ねて

夕食づくりと交流会

私は盛岡で生活していますので三月十一日の東日本大

震災に直接の被害はありませんでした。

けれど、友人や知人、教え子の中には、津波に呑みこまれ、今も行方不明のままとか、家を流され職を失い、これから先、どうやって生きていこうかと不安な思いで生活している人たちが結構あります。

そういう人たちに、何か力添えをしたいと、気にはしているのですが、個人では大したことができません。せいぜいが励ましの手紙を書いたり、わずかはかりの見舞金を送ったりする程度です。そんなわけで此の八カ月半は悶々たる思いで暮らしていました。

そんな中、日本各地から集まり、この「かわいキャン

」で寝泊りしながら宮吉市やその周辺の町や村でボランティア活動をにつづけておられる皆さん方のことを知りました。本当にありがたいことだと思っています。

罹災者、被災地のために、大切な時間と労力を提供なさっておられる皆様方に、感謝の気持ちを込めて、岩手食文化研究会では、何かお応えすることがないかと話し合い、岩手の郷土料理で、奉仕活動から帰ってきた皆様方を持ってなそう、ということになりました。云々

(被災地支援活動をしている方々との、夕食兼に交流会での挨拶より)

旧・県立宮吉高校川井分校は、今、「盛岡市かわいキャン」として、この度の大地震で被災した宮吉市、山田町、大槌町等でボランティア活動をしている人たちの拠点施設になっています。

震災から八カ月以上がたち、その数は減ったそうですが、それでも十人から二十人ほどの人たちが全国各地から集まり奉仕活動をつづけているとのことでした。

そこは、ボランティア自身が自己完結で利用する施設ですから、盛岡市社会福祉協議会が行う、仕事と人の組み合わせとか、被災地間の送迎車輛の運行以外、すべて自分のことは自

かでなければなりません。活動を終えて帰ってきてからの夕食づくりは、かぶり面倒のようです。

それで、岩手食文化研究会の十一月例会は、これまでとは趣を異にし、ボランティアの人たちに夕食をつくり、食事を共にしながら交流会をもとう、と云うことになりました。

ボランティアの人たちは、今はほとんどが県外だといふので、献立は、先の世話人会で、二子芋を使った芋の子汁、雁喰い豆で作った豆腐の湯豆腐、それに、菊の粕漬と三穀飯、と云った岩手の郷土食に決まりました。

十一月二六日(土)午後二時、三名の一般参加を含め、十三人が岩手大学に集まり、三台の車に分乗し、宮古市川井に向かいました。チームリーダーの井上美智子さんと小西陽子さんは、すでに一時間ほど前に出発しています。

この日は快晴で、区界峠には気掛かりな雪は多少ありましたが、通行に支障があるほどではなく、予定通り三時半には、かわいキャンプに着くことができました。ただ、空気は身を切るように冷たかった。

調理室に入ると、先発隊の井上さんと小西さんによって、それぞれ調理台に人分けの紙が貼り出され、つくる料理に合わせて器具が配置されていました。

調理室につづく廊下の連絡板には、「捜査特別報奨金三〇〇万円」と書かれた、川井地内で起こった女性殺人事件の容疑者・引歳男性の指名手配書に並んで、「今日の夕食は、岩手食文化研究会の皆さんが準備してくださいます」との貼紙がありました。

この日、施設で寝泊りしているボランティアは、女性が三人、男性が十七人の、都合二十人でした。

私らの世代は、「男子、厨房に入らず」で調理はからっきし駄目、包丁を握っても足手まといになるだけです。それでも、敢えて参加したのは、奉仕活動をしている人たちに一言なりとも感謝の気持を伝えたいかつたことと、これは、個人的な私の関心なのですが、どういつ人たちが、どういつ思っているのか、ボランティアに参加しているのか、また、ボランティアをとおし、物の見方、考え方が、どう変わっていくのか、そういうことを知りたい、と思ったからでした。

早く皆に会って、話を聞きたい、と思いました。

調理の方は、調味料に多少の不足はあったようですが、テレビの料理番組などで活躍している梅津末子さんやその仲間たちも参加しているので、極め所を押さえた仕事ぶり、ボランティアの人たちが帰ってくる六時半頃にはすっかり出来上が

っていました。

食事を共にしながらの交流会は、七時少し過ぎに始まりました。ただ、交流会での、私の聞き取りは、あまり上手くいきませんでした。

「どんな考えからボランティアに参加しているのですか？」前に座っている青年は、ちよつと首を傾けて

「ここには、もう十回ぐらいい来ています」話がどうも噛み合いません。

今の若者は、自分の思いや考えを言葉に置き換えて表現するのは、あまり得手でないのかもしれませんが、食事中は、理屈っぽい話よりも、もっと気楽に食事そのものを楽しみたい。確かに、こちらの方が本当かもしれせん。

「これ、ニ子芋っていいんですか、里芋は群馬にもあります」が、硬くってあんまり好きじゃない。これ、柔らかなのに全然煮崩れしないんですね。美味しいです」

「あの、エプロンつけたおはさんのような人、本当に岩手大学の副学長なんですか？、びっくりしました」話は、どうも俗っぽい方に流れていきます。

けれど、私の関心は、それとは別なところで伺い知ることができました。

調理室の正面にあるテレビの後ろ、差し入れのインスタント食品が並べられている台の上に、ノートが二冊、置かれてありました。表紙には「よみがえる日記」と書いてあります。これは、全国各地から集まったボランティアの人たちが、ここを退所する時、綴っていた落書帳のようなノートでした。その中に、いろいろな人の思いが、その人なりの表現で書かれています。

ノートを開いて、まっさきに目に入ってきたのは、キャンパスを去るほとんどの人が「ありがとう」と感謝の気持を伝えているということです。

「ありがとう ありがとう できればまたきたいです」

「有難うございました。人生変わりました」

「ここで出会った一人一人に感謝」

「最高のメンバーと最高の時間をありがとう」

ここで、何故、ありがとうなのか、ですが、それは勿論、次のようなことではないかと推測されます。

一般的に、奉仕活動に参加している人たちは、惻隱の情の厚い、ヒューマニテイな方々のように思われがちですが、実際は必ずしもそうではないようです。

ノートの中に、こんな記述があります。

「出水さんが、この、かわいキャンピングは人生の縮図だ、とい
っていたのを思い出した」

「私はこの五年間でうつ病を三度やりました」

青年期特有の悲観的、否定的なものの見方、考え方もあり
ましようが、中には今の自分に満足できず、漠然とした不安
を抱え、その空しさを埋めるように集まってきた人たちもい
るようなのです。

そういう人たちが、被災地で、瓦礫の撤去やへどろの掻
き出し、汚れた写真の洗浄、牡蠣養殖の筏づくり、仮設住宅
の話し室で住民の悩みを聞いたり、お年寄りのマッサージや
子どもの相手などといった労役を皆と一緒にし、自分も人の
為に役立っているんだということを実感したり、或は、ギヤ
ンプに帰ってきては、皆で酒を酌み交わしながら、思いの内
を語り、人の話を聞く。そういう時間を持つことにより、
人との繋りを深め、自分の居場所を見つけ、心に力を取り戻
していくようなのです。

「ボランティア同志、酒をくみかわし、話をさらけ出し、人
との結びつきを深める。ものすごく不由心儀なことだ」

「希望、勇気、自信や力を与えてくれる。大変貴重な時間を
過ごさせていただきました」

「みんな！ また会おう!! 勇気と焼酎はもらうていく」

ボランティアは、人の為に奉仕するものです。けれど実際
は、受けるものの方が大きいということのようです。

「よみがえる日記」は、初め、被災地、罹災者の復興を念じ
まつけられた表題だと思いましたが、案外これには、ボラン
ティア自身の、心の回復が込められているのかも知れません。
夕食を兼ねた交流会は、七時には終わりました。

夕めにつくった芋の子汁や三穀飯は、何度ものお代りで、
すっかりなくなりました。

皆で後片付けをし、お別れの挨拶をして、外に出ると、先
に出ていた人たちが空を見上げて驚嘆の声をあげています。

夜空いっぱいには、金や銀の砂子を撒き散らしたように、星屑
が輝いているのです。

「子どもの頃、見たような気もするが、こんなに綺麗な星
今の盛岡では、見られないなあ」

あきれたように呟いている人がいました。

零下四度だとか、けれど、心の内には、そんな寒さを感じ
ませんでした。

懐中電灯を手に出てきたボランティアの人たちに見送られ、
盛岡に帰ってきたのは、八時半頃でした。